

水を天に放つ者

むかし、ある娘が幼き日に住まいし庭へと戻った。

そこは乾ききった大地で、草木は声なき声で「水を」と叫んでいた。
庭の傍らには、すでに冥界へ旅立った隣の翁の影が立っていた。
翁は厳しきまなざしを送り、他家のものを借りることを快しとしなかった。

だが娘は心に思った――

「幼き日を共に過ごした隣家の子が戻れば、私は素直に告げよう」と。
その誠実の念が、彼女を守る盾となった。

娘はやがて、隣家に備えられた新しき清らかなホースを取り上げた。
水は地より解き放たれ、天へと昇る。
光をまとった水しぶきは天空に虹のごとき弧を描き、やがて雨となり庭を潤した。

それはただの水やりではなかった。
過ぎし者たちの戒めを受け継ぎつつも、未来の命を養う聖なる儀式であった。
乾ききった大地は蘇り、彼女の歩む道もまた、天の祝福を得て開かれていった。
こうして彼女は知らず知らずのうちに、「水を天に放つ者」として、新しき時代を告げる
巫女となったのである。